

とのことで、降車を思いとどまり遙かに部落を眺め母の顔がちらちらして泣いた、牡丹江高女を訪ね初めて陛下のお言葉を聞き、忠君愛国の至情に燃えている岩崎スミさんは地に伏して号泣、一泊してハルピン経由して新京につく。

在滿教務部を訪ね、退職金を受領し、一緒にきた教員に分配してあげた、若い教員なのに責任旺盛なあつぱれの手さばきである。

ここで、哈達河のことを聴く、哈達河の部落は惨憺たる地獄と化し、前方からソ連軍の攻撃、後方から反乱軍の攻撃に遭う、死か、脱出か、何れか、万事窮す、自決と決し、貝沼団長まっ先にピストルで自害、次々と合意の殺人自決、四百六十三人は、母は子を道づれに黄泉路へ旅立った、翌日、四百六十三人の屍の下から血に染まり傷ついた七人の子供はいあがって、お母さんと連呼して泣く、それを手助けしてくれた現地満州農民がいた、その七人こそ、岩崎スミ先生の教え子とわかった、悲痛限りなく号泣し、はるかに冥福を祈り続けた。

その後、岩崎スミさんは修道士の如く、会いたい一念で訪中三回目に、その教え子とハルピン邂逅し抱きしめてともども泣いた、この執念は神に通じた、岩崎スミ訓導の姿である

(杜引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

引き揚げ後の労苦

北海道 吉田 久子

終戦の混乱の続くハルピンでのこと

夫は召集、二人の子供に死なれ、部隊解散で夫の婦りを喜んだのも束の間、元使用人の満人に連れ出されソ連兵に密告し銃殺されて夫の持ち金は全部とられてた。

もう生きる望みもなく日本の親元に遺書を書き立木で首をつつたが輪がしまるようになかったため何度輪に首を入れても失敗した首の傷を後で言われて気が

ついたことでした。

その後五か月目の夫の忘れ形見をどんな苦勞しても産んで日本に連れて帰りたいと心に決め街で立ち売りしてお産の費用を稼いでいた。

ある日、偶然にSさんの奥さんに会いました。新婚当時主人の職場の先輩の奥さんで中々しつかり者でした。子供は四歳の男児と女の赤ちゃんがいます。「貴女どうしているの。」と聞かれたのでありのままを話しました。

「そんな家で気兼ねしなくともいいから私の家なら主人は召集されていないし、襲撃にもあっていないから気楽に暮せるから安心してお出でよ。」と言って下さいましたが、私は山本先生のお宅で大事にして頂いていますから、と辞退しました。

私は不思議に二人の亡児の遺髪と爪と、主人が出征する時、同僚と写した写真と、唯一枚の十円紙幣を大切にお腹に巻いていました。臨月が近付くにつれ、大事にしていた十円札を使って、お産の用意でもしようと思ひ十円札を開きました。驚いたことにパッとご光

がさして眩しいほど真赤になりました。

目を凝らすと、大日如来様ではありませんか、それも二人の子供の未年と申年の守り本尊なのです。本當に有難く伏し拝みました。内側は大日如来様なのに、表は十円札でした。誠に不思議なことで、お腹の子供を守って下さったのでしよう。

臨月迄酷寒のハルピンの街で立売りをしました。三月十二日、夕食後七時頃、後片付けをしておりましたら、「トロツ」と下り物がしました。すぐそのことを言いましたら、山本先生は、「お産が始まるから静かにしていなさい、奥さんは安産だからすぐお湯を沸かさないと間に合わないよ。」まだ全然陣痛も始まりませんが、お湯を沸かし始めました。案の定、九時には安産で男児が生まれました。

山本先生は、勇太郎さんの二番目の男児だからと「勇二」という名を付けてくれました。字画も良いので亡き主人の名をとって私も満足でした。

「田村君さえ生きてくれたら、勇二さんは大事にして貰えるのになあ。」と時々申します。そのお氣

持だけで私はどんなに救われたことでしょう。

お陰様で産後も楽に養生させて頂きましたが、私がいつも心にかかっているのは埋めて置いたお金さえあれば、十分に御礼も出来て私の気も済むものを甘えてはいられません。

三週間経ったら、何としても、霊をおろす所を探して、主人に色々聞いて見たいと日の経つのが待ち切れぬ想いでした。漸く二十一日目、勇二を背負ってハルピンの街をあてもなく探し廻りました。とうとう一軒見つけました。

私は修行の足りない「イタコ」は死人をおろすとき死ぬ間際、七転八倒の苦しみをするので嫌がると聞いていましたので、断られると困るので、主人は出征したきり音信不通だと言いました。「イタコ」は拝みながらどうも変だと言っていました、とうとう主人が出ました。

「貴方どうして死んでしまったの、二人の子供は貴方の側へ行っているの、お金はどうしたの、私はどんなに苦勞しても覚悟の上で貴方の忘れ形見を産んだの

見て頂戴」と矢継ぎ早々に言いました。「僕は劉に騙されたんだ、本当に情けない、お前は一人でも生きられない時世にどうしてその子を産んだのだ、どうして育てることが出来るのだ。」

「私は貴方に喜んで貰いたくて形見の勇二を生んだのに、どんなに苦勞しても勇二を育てたい。」と泣きました。

「僕が死んだばかりにお前に苦勞をかけて可哀相だ、二人の死んだ子供はお前に精一ぱい看病して貰ったから成仏したけれど、僕は君の苦勞する姿が可哀相で草葉の陰で泣いているよ、お前が生きるためにはどうかその子を犠牲にしてくれ。」と言いました。

「いやです、私はどんなに苦勞しても、この子を北海道の占冠に連れて帰ります。」

「そうか、どうしてもその子を育てようと思ったら、可哀相だが君が犠牲になってくれ。」

私は「どんなことがあっても強く生きて行きます」と泣き崩れました。

その帰り道、又、主人の職場のSさんの奥さんに会

いました。家へ来たなら何不自由なく気楽に暮らせるのだから早くお出でと言いました。私は思案にくれました。お世話になった山本様に御礼をして出られるならいざ知らず、何のお礼も出来ずとも山本さんには言えませぬ。

満州の早春は日中でも零下二十度くらいはあります。勇二に風邪を引かせたら大変です。

思い切って山本先生に相談しました。「主人の先輩の奥さんで、家財も一切被害にあっていないので、何の遠慮もいらなからおいで、と言って下さるので、何が。」と言いましたら、山本先生は、「奥さん、本当に大丈夫ですか、私は相手の人は知らないが、日本人は薄情ですよ。」

真から勇二さんと奥さんのことを考えてくれているのかな、僕は心配ですよ。――

この広い満州で真から勇二さんのことを案じているのは僕達だけだと断言出来ますよ、どうしても行くなら仕方ないが、勇二君のためならいつでも帰っておいで、待っているからね。」と言って下さいました。私

は感激の涙にくれました。

何の御礼もせずにSさんに行つて良いものかどうか、不安で再び主人をおろして聞きました。主人は「お前は本当にお人好しだな、付き合つて見て、あの人の怖さが判らないのかな、山本さんは真から良い人なのだよ、このままの方がいいよ、Sさんへ行つたら苦労するよ。」と言いました。私がもう行く約束をしてしまったのと言うと、困つたなと言いました。

Sさん宅へ行つて見ると大騒動でした。長男が馬車の鉄輪に引き込まれて顔から頭にかけて六十針も縫う瀕死の重傷を負つて、家で看病をしているのです。

二階に住んでいて、水は遠く迄つるべで井戸水を汲みに行きますが、バケツ一杯の水を汲むだけでも大変なことです。それからの私は水汲み、洗濯、看病と一日中身体がいくつあつても足りない程でした。御陰で子供さんは段々快方に向かいました。

毎朝暗い内から起きて炊事、洗濯を済ませて、家財道具の立売りです。Sさんの家財を売ってお金にするのです。夜は子供達の洋服作りです。内地へ帰る時の

用意です。私は少しの暇も有りません。夜遅くなるとう居眠りが出ます。「貴女は人の物だと思つて欲がないから居眠りが出るんだよ、誰がこんな世話をしてくれる人がいるの。」と一日中恩着せがましいことを言います。

外で水汲みに並んでいると、知らない人から貴方は一生懸命に働いてお金の毒にとか、可哀相だとか言われるのです。どうしてかと思つたら、壁一重で隣に筒抜けに聞えているとのことで大評判だと言われ、私はびつくりしました。

その内に男まで家に入れるようになりました。恐ろしいことに、目的は私と一緒にさせて自分達まで養つて貰うつもりなのです。私は帰国するまでに戦争のために惨めな死を遂げた主人や二人の吾子を遺骨にして、故郷へ帰り供養してあげたいのが只一つの願いでした。

「田村さんが死んだことがはっきりしているのだから、再婚して楽な方法を選ぶの当然でしょう、勇二さんに満足にミルクも買えないありさまで強気なことは

言えないでしょう。」と毎日責め立てます。とうとう明晩までに返事をするように申し渡されました。

優しい素晴らしい主人が他界して半年ぐらいでどうして私がそんな気になれましょう、私は死んでもいいです。

そんなことで私が苦しめば苦しむほど、勇二は引き付けを起こします。同じアパート内に医者だという方がいましたので、その度に飛んで行き、診て貰いました。

主人は「勇二を育てようと思つたら、お前が犠牲になつてくれ」と言つたけれど、こんなに私がいやなのにどんな判断を下すか、今夜はどうしても返事をしなければならぬので、思案に余つて又、「イタコ」に聞きに行きました。

断れば出て行かねばならず、拝みやさんで主人を出して貰いました。「貴方教えて、私はどうしたらよいのでしょうか」といくら尋ねても首を横に振るばかりで口を開いてくれません。拝みやさんが「主人は出ていきますが、どうしても貴方の質問に返答が出来ないので

すよ、本人がこんなにいやがっているのに、どうして一緒になつてくれと言えますか、主人は山本さんを信頼していますから山本さんへ行きなさい。」と言ってくれました。

その時、いつでも困る時は家へおいでと言つて下さったことを思い出しました。

その夜、また勇二が高熱を出して引き付けました。先生も「誰か会わせたい人がいたら、日が出ない内に行つて会わせなさい。日が当れば持ちませんよ。」と言われました。あの頃のハルピンは日本人が夜道を歩くのは危険です。暗い内から水を汲んで洗濯をして早朝、私は勇二を抱いて道外の山本先生のお宅目ざして人力車カキに乗りました。

山本先生はアヘン患者を治す病院で働いていますので前とは全然住所が違ふのです。私は今でも良く家が解かつたと不思議に思います。途中、夢中で勇二頑張つて山本の小父さんに会うまで頑張つてと泣きながら人力車から下りて満人に荷物を持つて貰つて走りました。ようやく病院に着きました。

「先生勇二を」と言つて先生に勇二を渡すなり腰が抜けて泣き崩れました。「良く来てくれたね、僕に任せたら勇二さんはもう大丈夫だよ」と言つてすぐ手当てをして下さいました。「よしえ、温湿布だ、頭を冷やせ」と奥さんと私は夢中で指示通り手当てをしました。先生と奥さん二人揃つて勇二のために献身的な看病を続けて下さいました。その日だけで勇二は六回も引き付けました。

白目をむいて、生きているとは思われない勇二を抱いて平然としている先生に奥さんが「お父さん何を呑気にしているの、勇二さんを死なせないで。」と言います。先生は「田村君が迎えに来ているんだな、勇二さんが生きていれば奥さんが苦勞するからな、不思議だな、心臓は健全なのに、田村君が連れて行こうとしている。」と言うのです。

三人の献身的な看病で勇二も漸く元氣になりました。御夫婦は、院長先生なのに親子四人で四畳半に住んでいます。私には早速、隣の二畳間くらいの物置を空けて住めるようにして入れて下さいました。本当に

御夫妻共、神様のような方です。

その後、私はぐっすり眠ることができるようになりました。戦前は駅の助役をしていたというMさんが病院の雑役をしておりました。患者の食糧を仕入れて食事を作ったり、諸々の仕事をしておりました。私も手伝わせて貰いました。勇二は時間を見計らって大、小便をさせました。二か月で殆ど夜昼おむつは使わなくなりました。Mさんも可愛い可愛いと、とても大事にしてくれました。

山本さんの奥さんが先生が心配しているから気を付けるように言われました。Mさんは九州に妻子を残して単身赴任していた方なのに私に結婚しようと言うのです。断ったが、同じ病院にいらしたので家を出る話となり、Mさんは前からいたのだから貴方が身を引いてほしいと言うのです。無理もないことですが、山本先生は、男一匹、どこへ行っても食えるが、乳飲み子を連れた人は生きて行けないと、Mさんがやめれば直ぐ病院の方が困るのに私達を置いて下さいました。

山本先生の所に置いて頂いた時が、色々と起伏は有

りましたが、私は精神的に一番心の安らぐ幸せな時でした。

よく世間の人は朝鮮人は人が悪いか、金儲けが上手だとか申しますが、決してそんな方ばかりでないことを声を大にして叫びます。

「奥さん、日本人はいざとなれば薄情ですよ」と申された言葉、私は本当にそう思います。自分達の家族が生きるのに命がけの時代ですもの、今は亡き山本先生に心から有難うを申し上げます。

その後いつ帰国命令が出るか判らないので、少しでもお金を作らなければならないと、現在使用している布団まで道路に出して奥さんと売りました。又、そこへ尋ねて来たのがSさんの奥さんです。「隣組では帰国の話で一ぱいなよ、田村さん、ここにいたら帰れないよ」(先生は朝鮮人だからです)「帰りたいなら家へ来て、帰る準備をしましょうよ」と言って来ました。

Sの入っている二階建てのアパートには十軒以上入居していましたが、殆どが旦那さんが召集されている女性、九州から出稼ぎに来ている独身男性等、誰彼か

まわらず同棲しているのです。

私はSさんには行きたくなかったけれど、私の荷物は全部残して来たし、売ってお金を作らなければなりません。山本さんにはお世話になりっぱなしで、後ろ髪を引かれる思いで帰りました。

帰って見て驚きました。私の物は泥棒に入られたという、布団も荷物も着物一枚も残っていませんでした。全部売り飛ばしてしまったのです。私は啞然として泣くにも涙も出ませんでした。そして毎日毎日自分の物を売らすのです。

とうとう帰国の話が本決りで、一人千円しか持てません。Sさんは一度もソ連兵の襲撃にあっていないので、私が一銭もない方が二人分の名義を借りるのに必要だったのです。

何も売る物もない、お金も無い、母乳は出ない、私は吾子にミルクを買うのに死に者狂いです。Sさんは物を売らしても一銭のお金もくれません。私が困れば困るほどSさんは好都合なのです。

いくらお金を持ってもコロ島から船に乗る時迄

に使ってしまわねばなりませんのに、せめて一人分の千円だけでも下さったなら、あんな苦勞をしなくて済んだのにと思いました。

とうとう昭和二十一年八月二十五日出発することになりましたが、二週間ものびてしまいました。次の日から、中華料理店からお惣菜を仕入れて、日本人が出発待ちをしている所を売り歩きました。「随分商売気のある人だね、子供を背負って物売りか」と笑われて中々買って貰えず、辛い思いをしました。

無理ありません、出発が遅延びていつ出発するかかわらず、お金も使われなのです。しかし私は明日のミルク代を働かねばなりません。どんなに笑われ、恥をかこうとも、頑張るしかありません。

漸く出来たお金を持ってミルクを買いに行きました。三百グラム入りの練りミルクが三百円もするのです。満人は日本人の足元を見て暴利を貪るのです。六か月の乳飲み子に離乳食を作ることも出来ず、これだけのミルクでは二日も持ちません。私はせめて故郷の土を踏む時だけは見窄らしい身なりはしたくないの

で、御召の着物一枚だけは残しておきました。その着物を持って行ってミルクと替えてほしいと頼みましたら、二十円ぐらいにしかとれないのです。何と情けないことでしょう。

世が世であれば、一枚の御召なら、ミルクぐらい何十缶でも買えるのにも思い、敗戦の惨めさに幾度泣いたことでしょう。

その時、私は生まれて初めて盗人心が湧きました。よーし今晩行って大きいミルク缶を盗んでやろう、どうせ満人に見つかっても謝ればそれで恥も外聞もないのだと、夜も露店でミルク缶を山ほど積んで売っております。いくらでも隙はあります。私はどうしてもこの子のために盗もうと側まで行きましたが、悔しいことに何としても手が出ませんでした。私はあの時ほど自分の馬鹿さを悔しく情けなく思ったことはありません。

錦西で漸く買った一缶のミルクを明けて見たらドロツとして嫌な気がしました。日本人の店なら痛んでいたらと行って行けば取り替えてくれますが、あの頃は絶

対にそんなことは通りませんでした。漸く買ったのを痛んでいると投げて代わりのミルクがないのです。今、この子が下痢したら、又、栄養失調や消化不良で死んだ二人の子供の二の舞です。

どうしても飲ませたくないが、代わりのミルクがない。弱い子供で苦勞はしたけれど、さいわい、下痢だけはしたことはないから、どうか下痢をしないようにと祈る思いで一度だけ飲ませました。すると一番心配していた下痢が始まりました。Sさんは貴方が飲ませるからでしょうと怒鳴りました。大金を持っているのにミルクどころか十円のお金もくれず、貰おうと思う方が間違っているのですが…。

もしも消化不良でこの子を死なすようなことになったら私が殺したようなものです。今まで何のために生きて来たか苦勞の甲斐がありません。

私は山本先生に下痢には肺炎の特効薬のトリアノンが効くと何年も前に聞いたことがあります。何としてもトリアノンを手に入れて、この子に飲ませたいと必死になつて引き揚げ途中の日本人に聞いて歩きまし

た。私共の中隊、小隊にはないので、ほかの中隊に行くには小隊長、中隊長の許可がいるとのことですが、そんな時間の余裕がありません。

私は夢中でこの子が死んでしまうから許して下さいと関所のような所でも無理に通りました。満人は私の勢いに啞然としておりました。トリアノンを持っておられる方はおりませんかと無我夢中で尋ねて歩きました。漸く一人おりました。押し頂いて早速お医者さんという方に処方して頂いて、下痢が止まりますことを願って勇二に飲ませました。栄養も与えられず弱り切っていた勇二の下痢が奇跡的に止まりました。飛び上がるほどの嬉しさでした。

夢中で探した「トリアノン」のお陰です。引き揚げの途中お子さんに亡くなられて乳房が張って、つらいから飲んでほしいと言われて、夜中にそつと私と代わって飲ませて貰おうとしても、神経質な勇二は人の母乳は全然飲んでくれません。本当に勿体ないと思いました。

途中で私のために山本先生の病院を出たMさんに会

いました。「田村さん、良く頑張って勇二さんを連れて来たね」と言って、お米を少し下さいました。私は有難く頂戴して早速お粥を炊いて食べさせようと外で枯草を集めて煮ていました。そこへ又、出発命令です。待ったはききません。

場所は忘れましたが、汽車から下りて八キロぐらい歩きました。リュックを背負い右肩に人工食を作る道具、左肩には、おむつや着替え、前には勇二を縛って、立っているだけで身体が痺れるほど重いのですが、一つとして投げる物はありません。生きるための必需品です。

私は身体が弱かったため、農家に生まれながら今までこんな重い物を背負ったことはありませんでした。

そんな姿で最後に急な坂道を登らなければ駅に着きません。滑っては転がり落ち、滑っては転がり落ち、靴はポロポロもうたくさんだ、勇二と一緒に死んだ方がどんなに楽になれるだろうと思いました。良くぞ体力のない私が生きてこられたものと思います。

誠に戦争ほど恐ろしいものではありません。在満日本

人は全部、ソ連に財産を奪われ、生きて来たのが不思議なくらい、苦勞に苦勞を重ねて来た者に國ではどれだけの援助の手を差し伸べてくれたでしょうか。

漸く汽車に乗ってコ口島に着きました。そこで頭から真白にD D Tを振りかけられ、嚴重な身体検査をされて輸送船に乗りました。

八月の猛暑、船の中は一分の隙間もないほど詰め込まれ、まるで蒸し風呂、ここにいたら勇二は一日も持たないと思い、すぐ医者のある部屋へかけ込み、「先生どうかこの子を助けて下さい、私はこの子に命をかけているのです。ミルクもありません、どうか助けて下さい」と恥も外聞もなぐり捨てて縋りました。

先生は驚いた様子でしたが、早速勇二を診て下さり、このままではもたないからと、輸送船の前方の機関室の涼しい所へ入れて下さって、「特別に船員の炊事場で離乳食を作りなさい。」と言われました。

先生、有り難うございました。今、これを書きながらお名前もお伺いしなかつた浅はかさを心から悔やみます。

私は温湿布をしたり、頭を冷やしたり、離乳食を食べさせたり、無我夢中で看病しました。

ここまで来て田村の両親に大事な息子と二人の孫まで亡くして、私が主人の忘れ形見も連れなくて、どの面下げて故郷へ帰れましょう。

でも、中々快方に向つてくれない勇二が弱って息絶えるのを見るくらいなら、いっそ海に飛び込んで死にたいと甲板で知らず知らずに口からもれた時、あんなが死んだら、ほかの人はどうなるんだ、死体が上がるまで船は立ち往生だぞと怒鳴られ、はっと我に返り、謝つたこともありました。

船に乗って一週間後、漸く佐世保に着きました。今度はコレラの検診です。一人でも疑似患者が出ようものなら陸地を目の前にして、一か月も上陸出来ません。

私は先生に「これ以上、御無理はいわれませんが、ミルクがないのです。」「このお母さんの熱意には負けななあ、診た時はとても助かる子とは思わなかつた」と申して、先生は私共二人をボートに乗せ、ほかの人達より先に上陸させて下さいました。先生、私は泣き

ながら書いております。本当に有り難うございました。早速、佐世保の難民病院に入りました。

漸く内地の土を踏んだ安らぎか、初めて、乳房が少し張りました。今考えても腑に落ちないのですが、なぜ病院でミルクやお粥が出なかったのか。

私は勇二を背負って遠い農家までお米か、米の粉が欲しくて行きましたが、お金がなくて何もいえずに帰った悲しい記憶があります。

五日後、Sさんが上陸して来ました。私にお金を持ち逃げされたら大変と思つてか、息せき切つて飛んできました。私は預かった二千元を返しました。北海道までの切符は援護局で支給してくれたと思います。

Sさんからいくら頂いたか覚えていませんが、汽車の中で美味しそうに食べているさつまいもを勇二に食べさせられなかった悔しさは忘れることが出来ません。勇二ご免ね、腑甲斐ない母を許してと、心で泣きました。

札幌には叔母がおります。どうしても無事に勇二を連れて行きたい、札幌駅に着き電車の中で又、勇二は

引き付けをおこしました。私は勇二勇二と叫びながら、電車を下りて、ひた走り、叔母の家へ駆け込みました。

七円の電車賃以外は一銭も残っていませんでした。とうとう二つ持った手荷物は勇二の引き付けにあわてて電車の中へ忘れて来てしまいました。叔母さんには娘時代から随分お世話になりました。

叔母さんは引き付けた勇二を抱いて、もう心配なくともいいよと早速お医者さんを呼んで下さいました。「良く帰つて来たねもう大丈夫だから家でゆっくりしなさい。」私にすぐ勇二の着物を作りなさいと生地を下さつたり、私に大島の着物等、沢山下さいました。早速、勇二の着物を仕立てたり、安堵の胸をなでおろし宙に浮いたような気持でした。

叔母は私に大島の着物を着せて、娘の恵美子さんと街へ行って楽しんでいらつしやいと執拗に言うのです。私は一銭も持っていない、何といわれても心に余裕がないので、行きたくないと言いましたが、私の懐に紙包みを入れてくれました。開けて見ると三百円

入っているではありませんか、叔母は私に小遣いを下さるために、無理に街へ行って遊んでおいでと言つて下さったのです。

叔母の暖かい思いやりに胸のあつくなる思いです。

このご恩は一生忘れまいと心に誓いました。叔母さん本当にお世話になり、有り難うございました。今こそ温泉とか方々に連れて行って上げたいのに現在八十五歳で足腰が悪くて旅行もできません。

佐世保に上陸した時、田村の家には「漸く日本の土を踏むことができました、後はお会いの節に」と葉書を出したさりで、どんなにか心配して待つてゐることか！先ず田村の両親に主人と孫二人の死を報告しなければなりません。終戦の混乱で音信も出せないままでした。どんなに心配をしていたことかと胸が痛みます。見たこともない小さい孫を連れて引き揚げて来たのです。どんなに嘆き驚倒されることかと恐れて帰りましたが、お母さんは、「前々から夢見が悪く覚悟をしていたんだよ、姉さんのハガキを貰つて、只事ではな」と思つていたよ、父もあなたの帰りを待ち焦がれて

いたが、今日、武治の結納に出かけたんだよ。良く頑張つて勇二を連れて来てくれた。」と言われ、妹や弟もいたわつて下さいました。

田村家の方は、父上初め神様のように良い心の方ばかりでした。以来四十七年の歳月が流れ、両親は他界されましたが、妹等は今でも私のような者を姉さん姉さんと大事にしてくれます。

二十二年一月十五日、親せきの叔父も来て、亡くなつた夫の田村家にいつまでもいるわけにはいかないから、実家に戻るのが至当でないかということになつて、「子供の勇二をどうするか。」と言われました。

私は「歓迎されない子でも命をかけて、引き揚げて来た大事な子です。私はどうしても離されない。」と言いました。父は我がまま一ぱいの人ですから、家だけでも子供が多過ぎて困つてゐるのに勇二を連れて来ると言います。

叔父さんは利夫さん（長男）に聞こうと、新年会に行つてゐるのを呼んで来て、「実は今話がこうなつてゐるんだが、利夫さんの意見を聞こう。」と叔父が言

うと、「勇二は姉さんが命をかけて連れて来た子だから離せないというのが当然でしょう。」と言ってくれました。その頃は実家の貧乏世帯は利夫が背負っているようなものでした。

父は、「久子がどうしても勇二を連れて来るというなら、養育費を貰わにゃならん」と言うのです。

利夫は、「普通だったら、養育費ということになるでしょうが、それは相手によるでしょう、相手が田村さんだから絶対にそんな汚いことは言わない方がいい。」と言うと、父は金もないのに勇二はどうして育てるんだと私の胸をぐさりと刺しました。

すると次男の茂夫が黙って聞いていましたが、「姉さん心配するな、勇二は絶対離すなよ。」と言うと、父が「誰が育てるんだ」「俺の給料は全部姉さんにやるから勇二を育ててくれ」と言いました。

私は娘時代、弟ばかりでどんなに妹が欲しいと思っただか知れませんが、この時ばかりは頼もしい弟を持つたことを誇りに思い涙に咽びました。

その時、田村の叔父上も来ておりました、田村へ行

って事情を話しました。田村家では初孫ですが、どうしても久子が勇二を離されないと言うので、何とか下さるようにと頼んだそうです。田村の父は「そうですか姐さんは勇二を離されんと言いましたか、母親に付いた勇二は幸福だが、勇二を連れて行ったら、姐さんの今後の身が立つのかなあ、本当にそう言いましたか、今まで勇太郎が満州から送ってくれたお金は一銭も手を付けてないから、久子さんに上げて下さい。」と、三千円下さいました。

私の父に比べて、田村の父上は何という神様のような方でしょう。私の前途まで案じて下さるのです。その言葉を叔父から伺った時、益々父上の偉大さに心を打たれました。

私は不本意ながら勇二を連れて実家に正式に帰って来ました。両親と八人の姉弟に勇二を入れて十一人家族です。

畠は、少し作っていましたが、母は心臓が悪く、今ならずぐ入院でしょうが、二、三步進んでは汗だくになって休みつつ畠へ行って働いたものです。

私は掃除、洗濯、食事の支度で一日中てんてこ舞いです。

とにかく、米はなく代用食の時代でした。朝早く一口口ほど離れた畠からビート（砂糖になる大根）や野菜を採って来て洗い小さく切り、大きな鍋で一日中煮つめ甘くして、馬鈴薯を煮て潰し片栗粉を入れてだんごを作り、おしるこの夕食です。弟妹と勇二の三人の世話をしながら頑張りました。

どんなに働いても身内の気兼ねのなさは何よりのやすらぎでした。母は度々早く利夫に嫁さんを貰いたいと言います。出戻りの私在家にいては嫁に来る人はいりません。

ある時、従兄弟の結婚式に行きました。あの頃は全部料理は自家で作るので、私も前日から手伝いがてら、勇二を連れて行きました。私より三歳年上の従姉妹は女兒を連れて来ました。冬の寒いのには、綿羊の毛を毛糸にして編んだ靴下を勿体ないとはかせないで素足にしているのです。その内に靴下がなくなつたと大騒ぎになりました。お手伝いの人が大勢来ているのに、「久ちゃんの持ち物の中を見て。」と言うのです。勿

論入っている筈がありません。「入っていませんよ」と言ったのに、「どうしてもないからもう一度探して。」と言われました。情けないことです。その靴下は結局エプロンの袖の中に入れてあったのです。

倉庫で料理の手伝いをしましたが、勇二は食物を欲しがる子ではありませんし、私も味見をするのも嫌いなもので何も口に入れていないのに、はなれに行つて「人が見ていないと思つて、どんどん食べさせていた」と言っていたとか。貧しい時の厭な思い出は忘れないものです。

結婚式の翌日です、勇二を連れて実家に帰ることで大変世話になった叔父、叔母さんが、「久ちゃん家に寄つて泊まつて行きなさいよ」と言つてくれました。

その時、父は、「勇二のようなうるさい奴は帰つて来なくてもいいから、ゆつくりして来い」と言いました。何という情けない親だろうと思いました。勇二よりは弟の方がうんとうるさいのに、孫よりは我が子の方が可愛いことをいやというほど思い知らされました。

叔父さんは、「久ちゃんは本当に可哀相だな、漸く我が家へ帰っても歓迎されず、気の毒だ、俺は久ちゃんはどうしたら幸せになれるか、そればかり考えているよ、お前は弟妹が多いから勇二さんを田村へ置いて来るといったものなら絶交だと思っていたよ。命をかけて連れて来た子をどうして離せるかなあ。」と言いました。

母は早く利夫に嫁さんを貰いたいと言うし、私がかにいたのでは、嫁に来る人はいないだろう、勇二を連れて生きてゆく術もなく、和裁の仕立くらい出来ても、三十年来の凶作という時に、着物を作る人もおりません。

思案にくれた私は又、亡き主人に聞いて私の身の振り方を決めようと決意し、富良野へ出て、霊をおろす所へ行き主人をおろして聞いて見ました。「私はどうしたら良いのでしょうか」と聞きましたら、主人は「引き揚げて来てからもお前が苦勞している姿を見て、自分が命を落したばかりに行く所へも行けない、どうか君はまだ若いのだから再婚して花を咲かせてくれ」と

言います。

私は「再婚する気は全然ありませんし、勇二を連れて子供のいない所へ嫁げるわけじゃなし、人の子を育てる勇氣ありません。」と言いました。「君の縁は近くで決っているからどうかそこへ行ってくれ」と言うのです。

いくら私のことを案じると、自分の妻だった者に再婚を勧めるなんて、ひどいわと私は腹が立ちました。帰って見ると、母から「吉田さんから、仲人を立てて何回も来ているけど、どうする」と言われました。私は驚きました。「君の縁は近くで決っている、どうかそこへ行ってくれ」と言われたことが頭に重くのしかかっていた所へ何ということでしょう。

主人の言う通りにしようと思つて聞きに行った私でしたが、再婚だけは気が進みませんでした。吉田の家は実家と二丁ぐらいいしか離れておらず、大農家です。二人目の子のお産で難産のために母子共に亡くしたのです。

母が葬式に「行ってくれ」と言いましたが、親には

逆いたくない私ですが、行きたくなくて、母をひどく怒らせてしまいました。残された女の子は勇二と同じ歳です。

私は若い時から農家の仕事に耐えられる身体ではなかったので、尚更再婚を嫌ったのです。

我が子を連れて、子供のいない方の脛をかじれるほど、厚かましい私でもありません、勇二を育てるためには、大農家で二歳になったばかりの子供を二人も育てながら、牛、馬、豚、緬羊、鶏等を飼って働き通せるとは到底考えられません。

けれども母はのり気なのです。外へ働きに行っている父に手紙で相談しました。「委細諒承した、酒の用意は充分にして置くこと」飲兵衛の父が結婚式に酒の用意を充分にすれとの返事です。

私はやけくそになりました。そんなに私が邪魔なら出てやろう。その代わり勇二だけは絶対に離さないと思って承知しました。なぜなら吉田という人は温和な方ですし、子供は同年でも女の児だからと思つたのです。親のない気の毒な子だから、育てられないことは

ないと思つて嫁ぐことにしたのです。なぜ勇二を離さねばならなかったか、今はこれ以上は書けません。本当に血を吐くようなつらい思いをしました。勇二は義妹に育てられ、国立大学を出て一流企業に勤め、二児の親として幸福に暮らしておりますのも、義妹のお陰と感謝しております。

その後再婚の夫、吉田は身体の弱い私のために、農業をやめ札幌に移転してくれました。大事に守られて四十四年、私も七十歳にもなりまだ生き長らえております。

執筆者の横顔

大正十一年生れであるが、七十歳にみえない身も心も若い吉田さんである。

昭和十七年、北海道から夢を追うがごとく希望あふれての渡滴、浜江省の阿城県玉泉におちついた、人も羨む仲睦まじい若夫婦である。それが、二十年に主人の召集にあい、新妻と幼児二人を満人街においての出征は、断腸の思い、久子さんの心情は主人のそれ以上の悲しみである。それぞれに二人は、万感交々の苦惱

きわまりないが、万止むを得ない。

八月八日、ソ連が越境して空陸両面からの爆撃で、阿城は混乱の巷と化し、その中を久子さんは健気にも動乱をくぐり抜け、二人を抱いてハルピンに避難した。十五日、ラジオで戦争が終った、と知る。その後召集された人々が帰宅して来たので、主人も召集解除した筈なので、所々方々まるで気違いのように探し求めたところ、ようやく再会できた。歓喜の上なく、主人も久子さんも泣きくずれた。満州騒乱の中でのできごとである。

ところが、主人の帰宅を喜んで迎えたとのみ思っていた、元使用していた満州人が主人を連れだし、なんの恨みか、賞金めあてかソ連軍に密告し、工場の中で金は全部盗られたあげく、銃殺された。何という悲しいこと。前途真つ暗になった久子さんは、臨月の身重で二人の幼児を抱いている。まもなく一郎はハシカで死亡し、続いて美穂子も消化不良で死亡してしまった。最早生きる術もなく、希望もなく死を決意して首吊りしたが、死にきれず失敗した。その後主人の形見であ

る赤ん坊を出産、乳飲み子を抱いて、生死の境地をさまよっていた。何人かの朝鮮人から、「俺と結婚すれば生きてゆける」等々と言われる度毎に、やりきれない憤怒の涙が流れた。けだし清廉の女性である。悲しみを乗り越え、二十一年、引揚げてこられたのに、幸か不幸か、とまで思った。たった一千円札を握って上陸した時は、まだ気持ちが悪くさんでいた。

北海道の亡き主人の実家に、祖父の家に、久子さんの生家に、まるでたらい回しのようにされて生きていたが、美貌の彼女が数奇な運命をきり開いてこれたのは、北海道のと根性の持ち主の眼にみえない強さである。さいわいに、有識の男性、吉田勇太郎に見初められ、母のたつてのすすめに従い再婚して既に四十四年になる。戦乱の巷で出産した先夫の息子、勇二は国立大学を卒業、一流企業に勤め、二児の父親となっている。波乱万丈のなか、正しい一筋の信念に生きる久子さんの人生の一面は、引揚者の範とするところがある。

(引揚者団体北海道連合会)

副会長 池田 幸次郎)